

## チェンマイ大学での貢献 (25)

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

2016年1月30日(土)第11回北部タイ大学日本語スピーチコンテストがチェンマイ大学のユニサーブで開催された。(The Northern Thai Universities Students Japanese Speech Contest 2016 at Falkham Room, UNISERV, Chiang Mai University)。日本の独立行政法人 学生支援機構 (Independent Administrative Institution, JASSO (Japan Student Services Organization))が主催し、在チェンマイ日本国総領事館、およびタイ王国元留学生協会北部支部の協力を得て、以下の団体からの協賛のもとで開催された。協賛団体及び組織並びに機関は次のようである。上智大学、日航、北部日系企業協議会、JCC, Bangkok Airways, The pure heart foundation, TIEDF, チェンマイハッピーライフ。昨年(2015)8月下旬に開催予定であった日本留学フェア (Study in Japan) がバンコックでの爆弾爆発事件で急遽取りやめになった代替イベントとも考えられる。日本語スピーチコンテストは以下の様なプログラムで開催された。ほぼ1日を費やすイベントで厳選された25名の大学生スピーカーが胸に番号をつけて待機し着席する中、順番が来ると次々と登壇し、演題に基づくスピーチを流暢に消化した。

受付 8:30、開会式 9:30

スピーチ発表 10:00、 昼休み (食)

12:30 発表

14:00 休憩

14:15 スピーチ発表再開

15:45 日本留学経験者の報告

16:15 コンテスト結果発表

16:45 閉会

優勝者には日本の上智大学に1年間の留学と奨学金供与を賞として授与される。上記したようにJASSOが主催する同種のイベントは一般に8月下旬にバンコックとチェンマイの2都市で開催されるのが普通であるが、昨年は爆弾騒ぎという思わぬ事件が起こり、取りやめとなった。筆者はこの事業に毎年訪れ日本の大学が出店するブースをくまなく周り、資料を集めチェンマイ大学の学生に紹介してきた。今回は時期外れな開催であったが週末ということもあり訪れる時間は十分にあったので朝一番から参加すべく駆けつけた。スピーチコンテストと平行して日本の24の大学がブースを並べ訪れる学生に資料を配布したり、説明を加えたり、例年の光景が見られた。

本報の論点は次のようである。筆者が会場に到着し、会場を歩き回っていると、2年ほど前に英語を教えてほしいと申し出てきた数名の工学部学生にボランティアで週1回の英語

講義を開講した。その時の学生 1 人の姿を見出した。尋ねてみると日本留学を考えたいの  
で見に来たと言う。更に日本語スピーチコンテストの会場に入り、開会式が始まってすぐ  
に後部座席から筆者の方を叩き「伊藤先生」と小声で呼ぶ声がした。振り返ると昨年 10 月  
下旬に中国の江蘇大学がホストとなり開催された第 22 回 3 大学国際ジョイント・セミナー  
シンポジウムに参加した学生の 1 人であった。プログラムが進んで休憩の時間にその学生  
に会い、昼食をともにしながら「どうしてこのイベントがわかったのか？」と尋ねると、  
インターネットにアクセスしてわかったと言う。「これぞ自分が望む、学生自らが自発的に  
行動する良き一例である」ことを確認し正直なところ嬉しかった。日頃から自らの意志で  
行動し、積極的に自分から探し、チャレンジせよ」と口癖のように言っているので、「よく  
ぞ自分が言っていることを理解してくれている」と言う思いがあり、ありがたかった。朝  
会場に到着した後「このイベントのことを何故研究室の学生にアナウンスしなかったのか」  
悔いた。でもまだ遅くない、今からでもと言う思いで更にもう一人の学生に電話で連絡し  
た。昼過ぎにその学生はやってきた。将来はやはり海外留学して大学の先生になりたいと  
言っていたのを思い出したので、迷わず電話でイベントの内容、場所、時間を告げておい  
た。筆者としては学生に何もかも指示し、命令して学生を動かすのではなく、情報は与え  
るがその後は本人の意志に任すという教育法である。「用があれば帰っても良い、必要で  
見るべき価値があると思えばブースを見て回れ」と言って後は自由に任せた。彼がどのよ  
うにしたかは筆者の知るところではない。もう一人の学生と連れ立って各大学のブースを回  
り始めたところまでは確認してその場を離れ、スピーチコンテストの表彰結果を見るべく  
会場に戻った。何よりも嬉しいことは学生の一人が積極的に日本留学に思いを馳せ、一生  
懸命その可能性を探している姿を見たことである。同じく昨年の 3 大学国際ジョイント・  
セミナー・シンポジウムに参加した女子学生の一人にもその前日偶然にも会った。聴くと  
ころによると 3 月から米国に 3 ケ月ほど留学する予定だという。誰が資金援助してくれる  
のかと尋ねると「もちろん母です」と言う答えが帰ってきた。総数 10 名のチェンマイ大  
学生が上記の 3 大学国際ジョイント・セミナー・シンポジウムに参加した。筆者は彼ら全員  
に、また個々に少なくとも 10 回弱会い、彼らの英語によるプレゼンのリハーサルに立ち会  
った。幸いにしてそのうちの一人はベスト・プレゼンテーション賞をもらう榮譽に輝いた  
が、まだまだ指導の不十分さを悔いている。せめて彼らと知り合った機会を大事にしたい  
と想い帰国後都合のつくメンバーに声をかけ食事に招待した。在職時代も 20 名に及ぶ学生  
をこのようにして自宅に招いたものである。彼らの多くは筆者が定年退職の時にも、就職  
先から多忙な中、筆者の自宅に駆けつけ夜が明けるまでお祝いと御礼の言葉を寄せ書きで  
プレゼントしてくれた。まさに教師冥利とはこのことかと込み上げる嬉し涙に浸ったもの  
である。中国でのシンポに参加した彼らの多くは 4 年生なのでもうすぐ卒業する。未だ就  
職が決まっていない者もいるが、是非とも出合いをバネに頑張っ欲しいと願う今日この  
ごろである。



図1 日本語スピーチコンテストの光景



図2 日本の大学のブースを回る学生達



図3 筆者のよく知る工学部学生の一人



図4 昨年国際シンポに参加した学生達